

# 命の重さを教えてくれた 看護婦さん

★  
一般部門  
入選

【兵庫県・相崎美知子】

第一子出産という緊張と感動の瞬間は予定日より40日も早く訪れました。産声も上げず、顔も見られないまま、長男は救急車で県立の未熟児センターへ移送されたのです。

産後初めての面会で私が目にしたものは、赤ちゃん、と呼ぶのもためらわれるほど黄胆とチアノーゼがひどく、足の震えが止まりませんでした。数日後、主治医から、長男がダウン症であることを告げられ、それ以来、頭の中で「ダウン症」「障害児」という言葉がもつれ合いました。せめぎ合って苦しい日々が続きました。それでも悲しいほどあふれる母乳を搾って冷凍保存し、バスで病院に届けるのが私の日課となりました。

ある日、面会室から眺める長男の保育器の周りを10人ほどの先生や看護婦さんが取り巻いている場面に出くわしたことがありました。この光景を目にした瞬間、私の心に恐ろしい感情が頭をもたげたのです。「もしかしたら、危篤状態になったのでは…、このま

ま天に召されてくれたなら…」と、一瞬でもわが子の死を望んだ自分が確かに存在したのです。この時の罪悪感はず30数年たった今でも、鮮明に心の奥底に潜み続けます。

障害のあるわが子を疎み続ける耻ずべき親であり続けたかもしれないなかつた私に、命の重さと、人としての心を教えてくれたのは、1人の看護婦さんでした。未熟児室のドアをそつと開けて、長男を抱っこして私の前に立たれたその方は、「先生から、ご長男の命は長くないと聞きました。一度も抱っこされないままでは余りにもお気の毒と思いが、ご長男をお母さんの胸に一度だけでも…と考えていました」と言われ、長男を抱かせて下さったのです。誕生以来、一度も触れたことのないわが子。その体温。その息づかい。ピクリと動く小さな指先。私の全身に電流が走り、勝手にあふれる涙を拭くこともできず、私はその時、この子の命を守り抜こうと誓ったのです。